

■ 書 評



オープンダイアログとは何か

斎藤 環 著+訳

医学書院

2015年7月発行 208頁

定価 1,800円+税

「開かれた対話」だけで人が回復する。

現在の日本の精神科医療が根本から変わるのではないか。そんな期待を抱かせてくれる「オープンダイアログ」から目が離せない。

「オープンダイアログ」は、フィンランドの西ラップランド地方、トルニオ市にあるケロプダス病院を拠点として発展し、世界中から注目されている。

苦境におちいった人やその家族が精神科医療システムに助けを求めると、専門家チームが24時間以内に駆けつけて、「開かれた対話」を行う。患者・家族・大切な関係者をまじえて車座になって行われる対話は、危機が解消されるまで毎日のように続けられる。「心理的連続性」が重視され、支援チームの招集やミーティングの開催には、依頼を最初に受けたスタッフが責任をもつ。治療が長期にわたり、たとえ入院を要したとしても、同じチームが最初から最後までかわり続ける。

治療方針は必ず全員がそろった場で話し合われる。治療に関してスタッフだけで話し合うことはなく、本人の意向を抜きにしては、いかなる決定もなされない。

全ての参加者が発言する権利をもっており、意見が食い違った時には白黒をはっきりさせるのではなく、全ての声が受け入れられることが優先される。危機によって生じる不安や恐れを含めて、それぞれの声が継続的に受け止められる場の安心感が、「不確実性への耐性」を生む。

専門家達は本人や家族の前で率直に見解や感想を語る。リフレクティングを受けたさらなる対話の積み重ねにより、体験は言語化され、物語は再構築されていく。

「対話主義」の根底にあるのは言葉への信頼である。

対話は手段ではなく、それ自体が目的であり、治療は副産物としてやってくる。恐るべき耐え難い経験を伝えるための声や言葉を奪われ、まるで“孤島”に島流しにあったかのように、モノログを重ねることを病める状態とするならば、あらゆる発話に応答し、モノログをダイアログへと開く「問い」をそこに投げかける。内的対話、つまり内なる自己との対話の中で葛藤している者に対して、治療チームは全人格をもって率直かつ能動的にかかわり、共有可能な言語表現を導き出し、心に染み入るダイアログを紡ぎ出す。

はっきりとした治療対象や、家族の病理構造は想定されない。ただ複数の自立した主体の、対等な複数の声達によって「ポリフォニー」が形成され、それ自体が治療資源となる。単純な合意や結論に至ることを目的とせず、安全な雰囲気の中でメンバー相互の異なる視点が接続されることこそを目指す。オープンダイアログの空間の中で相互性のあるやりとりが続いている限り、決しておかしな方向へは向かわないだろうという信頼が、「不確実性への耐性」を強め、「ポリフォニー」は鳴り響き続ける。

Nothing about us without us (私たち抜きに私たちのことを決めないで)のスローガンと共に創られた障害者権利条約が、日本でも批准された。オープンダイアログ、Shared decision making (共同意思決定)、インテンショナルピアサポート、「三度の飯よりミーティング (べてるの家)」、あるいは『被抑圧者の教育学 (パウロ・フレイレ)』。対等な関係性における対話の重要性・有効性を多様な視点から語る『専門家チーム』が招集され、「オープンダイアログが人を癒すのであれば、現在の精神科医療は?」「主体的な意思決定についてどう思っている?」などと、問いが投げかけられ始めている。

ただ病理を記述し、代行意思決定し、声を鎮静する。そんな精神科医療システムについての病理構造を語るのならば根は深く、本書で著者が述べる精神医学の「抵抗」の大きさは計り知れない。

『オープンダイアログとは何か?』

無知、恐怖、司法とのはざままで重ねられてきた精神医学や精神科医療システムのモノログを、ダイアログへと開く、やさしい「問い」が投げかけられた。癒しのポリフォニーが鳴り響き始めている。

(熊倉陽介)